8・15　戦争を語り継ぐつどいシンポジウム
「さいはてのいばら道」を生きのびて

飯田清久

オープニング、竹本源治の詩を力強く合唱する現退教職員の熱い声が心に響く。「満州分村と江川崎開拓団」がテーマの今年のつどい。15歳の時、江川崎開拓団員として入植した武田邦徳さん。89歳という年齢を感じさせない力強い声で、凄惨な体験を語ってくれました。銃声、放火、襲撃が繰り返される毎日、槍で刺され内臓が飛び出している仲間になんの手当もできない現実。「今日の昼に生きているかわからない」不安を抱える逃避行、少しの差で逃げ遅れた人が殺されていく厳しい現実をかいくぐってきた体験談を、本当に胸の痛む思いで耳を傾けました。お話のまとめで言われた「あの悲劇を忘れてはいけない。あなたの隣にいる人にも知らせてほしい」の訴えは、今日のつどいの本質を示すものでした。武田さんは開拓団の記録誌「さいはてのいばら道」を執筆、開拓団の語り部の活動を続けています。

中野ミツヨさん（72歳）。江川崎開拓団員の母親が終戦後の逃避行中にミツヨさんを生み、その後中国人の養父母に預けられ、1985年身元が判明し、1988年43歳で永住帰国され現在高知市に在住する方です。中国での養母との暮らし、日本人であることのイジメと差別、永住帰国、日本での暮らし等、「苦労」という言葉では軽すぎる体験を切々と語ってくれました。そんな悲惨な体験の中でも中野さんは、「実母は命を懸けて私を生んでくれた。そして生かしたい、助けたい一心から私を預けた」「養母は敵の子どもでも命を懸けて守り育ててくれた」の発言に、気持ちが救われる思いがしました。日本の国策によって満州に捨てられた中野さん一家、そして帰国後も国による十分な補償や居場所がなく困難な生活を送った中野さん家族。「国策によって捨てられた」「悲惨な歴史は繰り返してはならない」「二つの祖国、両方大切。日中友好に努めたい」の結語。中野さんの体験談は、まさに山崎豊子の「二つの祖国」を想起させるずっしりと重いお話でした。

シンポジウムのまとめ役、高知新聞記者の楠瀬慶太さんによる「満州分村と江川崎開拓団」の説明および歴史背景の分析、高知戦争資料保存ネットワークの活動報告もあり、歴史を伝え記録し残す大切な取り組みを知りました。

退職教職員団体の持ち回りで開催されている8・15のつどい、来年はわが高退協が主管です。歴史に学び、戦争のない社会を次の世代にしっかりつないでいくため、知恵を出し合って実りあるつどいを企画していきましょう。

8・15戦争を語り継ぐつどい　8月15日

歌声に参加する高退協会員

閉会あいさつをする
倉橋高退協会長

インタビューを受ける高退協飯田副会長

核兵器のない平和で公正な世界を

―第64回原水爆禁止四国大会in高知―

小松　茂弘

「核兵器禁止条約を力に―核兵器のない平和で公正な世界を」を合い言葉に、7月21～22日、高知市の高知城ホールで第64回原水爆禁止四国大会が開催されました。

高知県原水協の和田忠明さんが歓迎あいさつをし、ビキニ訴訟判決が出されてすぐの時期、梶原弁護士から特別報告がありました。ビキニ海域での被爆は第五福竜丸だけは隠しきれなかったが、同時期に同海域にいた1000隻の漁船乗組員の被爆は隠蔽された。日本政府として被爆事実を60年にわたり隠し続けたことは基本的人権をないがしろにし、非人道性を露わにするものだ。政府の行為により、米の核戦略を優先するもので許すことはできず、控訴準備中であると報告がありました。

記念講演は、日本原水協常任理事の川田忠明さんが「核兵器廃絶にどう前進するか―朝鮮半島非核化をふくめ―」と題して行いました。北朝鮮の核・ミサイル開発の目的を分析し、対立ではなく平和が必要であることが強調されました。核兵器廃絶へのせめぎあいに対して、決め手は世論であり、日本の外交政策は「核の傘」から脱却し憲法9条をもつ被爆国として憲法を生かした外交が最も現実的な安全保障であり、未来への選択だと熱く語るのに心が染みました。

次の日の分科会は、「第1分科会　ヒバクシャ国際署名・署名連絡会の結成を」「第2分科会　伊方原発は大丈夫？」「第3分科会　被爆者と心をつないで」「第4分科会　ビキニ被災ってなあに？ビキニ被災申請の経過」の4分科会で行われ、活発な論議がなされました。

記念講演する川田忠明日本原水協常任理事

第35回高知平和美術展を終えて

高知平和美術会会長　森　哲実

今年は平和美術展も35回目の節目の年。実行委員会では、出品者をどう増やすかについて議論しました。出品を呼びかけた時平和をテーマにした作品を描いていないのでという理由で出品を躊躇する人が依然多いのではということで、イメージとしてテーマの縛りがないことを定着させるためテーマ制作の呼びかけをやめることにしたのです。自由に自分の表現したいものを出すことができる雰囲気を大切にしました。そして、企画展示としてのコーナーを設け、平和に関わるテーマの特別展示をするようにしました。今年は、「ビキニの証言」写真展。地道にビキニ被災の被害者を訪ねて聞き取り調査を重ねてきた草の家副館長の岡村啓佐さんの写真20点とその資料を展示しました。また、展覧会期間中の「平和講演会」は、沖縄をテーマに同じく岡村啓佐さんが現地で取材した辺野古の現状を語ってくれました。スライドを見ながら「沖縄の基地を高知県に置き換えたらどうなるか」という想定で自分たちの生活に置き換えて考える事を提起してくれました。沖縄のことを私たちは人ごとのように捉えていないか、改めて問い直したい講演でした。

出品作品は、絵画48点、書28点、写真25点、彫刻立体6点、工芸14点、絵手紙2点、という内訳でした。出品総数は126点、出品者77人でした。今年も力作がたくさん集まりました。

平和の壁に花一輪。「たとえバラ一輪の絵でもいい、平和の壁に参加することに意味がある。」亡くなった彫刻家佐藤忠良さんの言葉は平和美術展の原点を伝え今に生きている。全国52か所で毎年開催される平和美術展が、ややもすると忘れがちな平和であることの大切さを今年も思い起こさせてくれるだろう。

高退協のみなさん、創作活動をしておられる方も多いと聞きます。あなたも平和のため出品しませんか？